

「神の国の報酬」—マタイによる福音書講解説教 81—

マタイによる福音書 第20章 1節～16節

説教 岡村 恒 牧師

主イエスのたとえ話は私たちの常識や理解をいつも超えます。私たちが考える常識や理屈と全く違う視点から結論が出てきます。主イエスはぶどう園の労働者のたとえ話を、お語りになりました。厳密に言うと、ぶどう園の主人の話を主イエスはなさいました。神のことです。神がどういうお方で、私たちに何を、どういうように与えたいとお考えかを、このたとえ話を通して私たちに教えておられます。

神は全知全能です。神のぶどう園で、ぶどうが実ったとき、本来なら労働者を必要としないのです。ご自分で収穫することもおできになります。しかし、わざわざ夜明けに出かけて労働者をぶどう園に連れて行かれます。このたとえはもう入口から不思議です。しかし、聖書の答えは明白です。一人でも多くの人をご自分のところに招き入れ、そこで豊かな命を得て生きるようにしたい、神がそうお思いなのです。神は私たちが闇の中で飢え渴いたまま滅び去ることを良しとされないのです。

夜明け前に、9時、12時、3時、5時、何度も繰り返し出かけて行って探し出し、声をかける。飢え渴く人に1日1デナリオンの報酬が約束されました。労働者1日の賃金に相当する金額だと言われます。それがあれば命がつながります。実際に、ぶどう園にどれだけの労働者が必要だったのでしょうか。必要人数の限界がないのではないのでしょうか。そこに命を得たいと思う人がいれば、この主人は1人残らず招き入れてしまうのです。聖書は言います、「ひとり子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネによる福音書 3章16節)神の国には収容人数の限界がないのです。

日が暮れました。一切の終わり、精算の時です。〈終末〉、私たちがそう呼ぶ世の終わりです。監督は労働者たちを呼びます。普通なら、まず朝一番から働いてきた人が呼ばれて報酬を受け取るはずですが、しかし、主人の命令に従って、最後に来た者が最初に呼ばれて、1日分の報酬1デナリオンを受け取ります。最初に来た人たちは、もっと多くもらえるだろうと期待を膨らませます。私たちの常識はそうです。しかし神のお考えは違います。ついさっき来た人にも、何時間もそこで汗した人にも同じように与える。最初に来た人たちは不平を言いました。しかし神からご覧になれば、それは不当でした。

1人1人に与えたい、これは本当に力強い言葉だと思います。

私たちは、つい夜明け前から働いて一番不平を言っている人たちに身を重ねます。多くの信者は、聖書の言葉を読んで、自分が何時からここにいるかということを考えました。そして、実はついさっき神に召された者ではないか、と思うようになりました。神の恵みに比べて、私がこれまで神に捧げてきた物、時間、力がどれほど取るに足らないか。ましてや神のひとり子イエス・キリストの命に比べれば、自分がどれほど小さな者か思い知らされるからです。しかし、神から何ひとつ頂く資格のない者に有り余る命を与える、これが神のなさりようです。

本来私たちは、世の終わりまでたたずんで、飢え渴き滅び去るはずでした。神は、深い憐れみによって、永遠の命を与える日を待ちわびておられます。もうすでに約束され、私たちに、神を信じ、主イエスを信じる者に注ぎ入れられている命が、終わりの日、私たちを満たします。

私たちに神の子の愛の招きに応える時間が与えられました。永遠の命の約束は、主イエスによって確実に実現した約束です。それが完成のときを迎えるまでの時間、ある人にとっては人生の長い何十年、ある人にとっては洗礼を受けてから地上の旅を終えるまでのわずかな時間かも知れない時間、それは、神に仕え、神に感謝を捧げるために与えられた時間です。

天国には上座も下座もないとよく言われます。神がおられ、主イエスがおられる食卓は、神の救いに入れられた者が皆共に集い、同じ報酬を、神の永遠の命を受け取る食卓です。地上にありながら、私たちは事あるごとに天の国の食卓を囲みます。あなたに約束された1デナリオン、永遠の命の報酬はこんなに豊かで確実だ、そう言って主が私たちに与えてくださった食卓だからです。

まだ夕方になっていないので、私たちはなお地上を歩んでいます。ひたすら神に捧げ尽くして生きる時間のただ中を歩んでいます。この時間を感謝して受け取り、神をほめたたえながら、夕方、報酬を目にする救いの完成の時を待ちわびたいと思います。

(記 説教要約奉仕者)